

伊延敏行\*： ムラサキリュウキュウツツジの  
自生に関する一考察

Toshiyuki INOBE\*： A study of the autogenesis  
of *Rhododendron hortense* Nakai

1948年5月5日、徳島市の眉山北面の尾根で採集したツツジが、故中井猛之進博士の鑑定の結果、ムラサキリュウキュウツツジ *Rhododendron hortense* Nakai であることが判明し、長らく国立科学博物館に展示されていた。当時自生地不明のツツジであるが故に波紋をよんだ。県内の同好の志の中にも疑義をはさまれたことが思い出される。人の通るべき道もない稜線で半ば埋れた岩石上に2~3本が叢生していたもので、栽植の可能性は全く考えられない。ただ栽培品の種子が鳥獣その他の動物か、或は気象的な関係によって運ばれたものが発生したのではないかと自問自答していた。以来23年後の1971年5月5日偶然にも同月同日に郷土植物の研究家、高藤茂氏によって徳島県名西郡石井町石井の前山（俗称）にて数株のムラサキリュウキュウツツジが発見された。樹幹の大きさは眉山のものと、この前山のものとは大同小異で、根際の幹の直径3cm、高さ2m余に及ぶものが3~4本で一株となっていた。その他に直径1.5cm内外の小型のものが3株、中型で直径2cmの大ものが2株、合計6株が点生していた。

眉山とこの前山は吉野川南岸の同じ山脈上に位するとは言え、眉山は吉野川の支流鮎喰川で切斷されて孤立状態になっている。この眉山と前山は東西に約10km離れているが、地質も同じ結晶片岩系で、植生状態も大差は認められない。いすれも陽向の地で僅かばかりのアカマツが散生していて、ヤダケやススキの草原にモチツツジが群落状に生茂っている。その中にネズミサシ、ネジキ、ナツハゼ、ツクシハギ、アキグミ、ソヨゴ、ヒサカキ、などの矮生木本に、サルトリイバラ、ノイバラ、テリハノイバラ等が混生している程度で、いたって貧弱な植生状態である。この前山は標高150m余の稜線上で人の通りはほとんどなく、ただ兎路が見られる程度である。眉山も南北の支脈の稜線上に生育しているもので、標高も100mには満たない程度であるが、全くの自然状態で、眉山も前山も同様にこのツツジの栽植は全く考えられない。

これ等のムラサキリュウキュウツツジは自生品と見るのが妥当な考え方であると思はれる。この人跡まれなる山中に栽培品として知られているこのツツジの発生について考えられることは種間の交雑による自然発生である。リュウキュウツツジ *R. mu-*

\* 四国女子短期大学生物研究室 Biological Institute, Shikoku Women's Colledge, Tokushima.

*cronatum* G. Don はモチツツジ *R. macrosepalum* Maxim とキシツツジ *R. ripense* Makino の交配により生れたものと考えられている。ムラサキリュウキュウツツジはモチツツジと何かの交配により生れたものとされている。次に掲げる調査の結果より、このムラサキリュウキュウツツジもリュウキュウツツジ同様にモチツツジとキシツツジの交雑によって生れたものと推定される。

幸い徳島県下にはモチツツジもキシツツジも同様に余りにも豊富で、余りにも分布が広く一般的に忘れられたツツジのようである。然しこれらほど親和性の強いツツジも他には見られない。ここに注目して、1950年にキシツツジとモチツツジの自然交雫の調査を、徳島県名西郡神山町阿川の河岸で行った。長さ 100 m 宛の二ヶ所を選び計 200 m、各河川の水面より高さ 30 m の区間に更に 10 m 宛の三区間に分け、河川より A, B, C 区としてそれぞれの区間に生育しているツツジの小枝を採取して観察したもので、その観察結果は第1表である。

第1表

区 分	A区(0~10 m)	B区(10~20 m)	C区(20~30 m)
種名			
キシツツジ	13%	0	0
キシツツジ×モチツツジ	85%	53%	5%
モチツツジ	2%	47%	95%
調査本数	(518本)	(283本)	(165本)

それぞれの調査結果のツツジの形態の比較の便を考えて更に第2表を掲げることにした。

第一表のA区では、キシツツジは非常に少く、一見キシツツジと思はれるものにはキシツツジとモチツツジの雑種（第2表Bの 1-7）が多く、この区内ではこの雑種が主体となって河岸をおおっている。これをキシツツジ型の雑種とする。

B区ではキシツツジは全くみられず、モチツツジの発生が目立っている。両者の雑種もとみに減少しているが、キシツツジ型の雑種（第2表Bの 1-7）と、葉型その他の点よりモチツツジ型の雑種（第2表Bの 8-10）の二つの型に分かれている。

C区ではモチツツジが主体となり、僅かながらもモチツツジ型の雑種（第2表Bの 8-10）が見られるにすぎなくなっている。この区に見られる第2表Bの 10 は、当時本田正次博士によりアワノモチツツジ *R. macrosepalum* Maxim var. *diplandrum* Honda とされたもので、これは第2表Dのムラサキリュウキュウツツジによほど接近した一種と見られる。

第2表

区分		葉形(春葉)	花梗の 腺毛	がく片	花絲	花柱	子房	花色
A	キシツツジ	長橢円形	無	皮針形腺毛	10本点毛	無毛	白毛	淡紫色
B	(キシツツジ型)	長橢円形	有	皮針形腺毛	10本点毛	無毛	主として 腺毛	淡紫色
		長橢円形	無	やや短皮針形 腺毛	10本点毛	基部白毛 と腺毛	主として 腺毛	淡紫色
		長橢円形	有	やや短皮針形 腺毛	10本点毛	無毛	主として 腺毛	淡紫色
		長橢円形	無	やや短皮針形 腺毛	10本点毛	無毛	腺のある 白毛	淡紫色 (濃紫色1本)
		長橢円形	無	やや短皮針形 腺毛	10本点毛	基部腺毛	主として 腺毛	淡紫色
		長橢円形	無	やや短皮針形 腺毛	10本点毛	基部白毛	白毛	淡紫色
		長橢円形	無	皮針形腺毛	7~8本 点毛	無毛	主として 腺毛	淡紫色
		モチツツジに 近き中間型	有	長皮針形腺毛	10本点毛	無毛	白毛と腺の ある白毛	淡紫色
		モチツツジに 近き中間型	有	皮針形腺毛	10本点毛	無毛	主として 腺毛	淡紫色
		倒皮針形	有	皮針形腺毛	10本点毛	無毛	主として 腺毛	淡紫色
C	モチツツジ	倒皮針形	有	長皮針形腺毛	5本点毛	無毛	腺毛	淡紫色
D	ムラサキリュウキュー ツツジ	橢円形	有	皮針形腺毛	6~10本 点毛	無毛	腺のある 白毛	濃紫色

子房に腺のある白毛を有するものは少く、第2表Bの4と8が挙げられる程度で、他はいづれも腺毛が主体で白毛をごく僅かにまばらに交えているものが最も多かった。花色はただ一株が濃紫色のものが見られたが他は全部が淡紫色であった。

本調査では葉型がムラサキリュウキュウツツジ型えと変化をたどっているもの、或は変化したものは全くみられなかった。調査区外ではあるが1950年に調査地区より500m上流の阿川や、1960年に眉山北面、1971年6月には眉山南面の山麓などで、モチツツジでありながらムラサキリュウキュウツツジと紛ぎわしいものが見られ、花を調べないと見分けられない一型がみられた。以上の調査で判明したことは次の2点が挙げられる。

(1) 河岸やその近くにはキシツツジ型の雑種が主体となって生茂っていたが高さが増すにしたがい、この型の雑種は次第に影をひそめて、これに代りモチツツジ型の雑種が姿を現しはじめ、遂にはこのモチツツジ型の雑種のみとなっている。これらの雑種は、河岸周辺ではキシツツジと一見しては見分けられないキシツツジ型から、上部ではモチツツジと一見しては見分けられないモチツツジ型えと移行の状態にあるかのように分布している。

(2) 第2表の A. キシツツジ、B. キシツツジとモチツツジの雑種、C. モチツツジ、D. ムラサキリュウキュウツツジの各種には、七個の調査要素がそれぞれ交互に含まれていて、ムラサキリュウキュウツツジの発生の可能性を物語っているようである。

ムラサキリュウキュウツツジの発生地眉山は約100m、石井の前山は150mのそれぞれ山稜地帯で、石井の前山の南面直下には鮎喰川の清流があり、その河岸の所にはキシツツジが生育していたが、道路の改修と共にその影をひそめ余りみられなくなつたが、現に歯辻附近にはしばしば見受けられる。眉山の南面には園瀬川がありこのツツジが僅かながらもその影を止めている。眉山の北面には現在は河川はみられないがその昔には鮎喰川がこの山麓を流れて新町川に注がれていたもので、その当時には公害は全く考えられなく、この河岸にもキシツツジが生育していたものと想像される。これらの河川の周辺にはキシツツジが水面より10mにははるか下廻った地点にのみ生育している。このキシツツジも他の地方の例の如く純粋なものではなく、果実の様子から所謂キシツツジ型の雑種とみてよい。僅かながらもモチツツジ型の雑種でおしへの7本前後の不安定型のものが見られた。

徳島県下を広く見わたすと、キシツツジ型の雑種は吉野川の上流西祖谷山村では1926年の調査では標高1300mの地点にまで生育していることが確められた。モチツツジ型の雑種は鮎喰川の上流地帯、特に神山町の神領では1962年の調査では河岸より約100mに達している。1942年には徳島県名東郡佐那河内村のロクロ峠標高1000m附近でアワノモチツツジを採集したこと等から、モチツツジ型の雑種やキシツツジ型の雑種は、所によっては相当の上位まで進出がみられるが、稜線地帯までには達してい

ない。

以上の諸点を総合して考えられることは、稜線地帯を発生地としているムラサキリュウキュウツツジの自生品は、標高度の如何は別としてモチツツジとキシツツジの自然交雑により発生したものと推定することの可能性は大きい。その発生も河岸地帯ではキシツツジ型の雑種、中腹地帯ではモチツツジ型の雑種、山稜地帯にはムラサキリュウキュウツツジと一連のつながりを持って発生しているのではないかと予測される。

### Summary

I collected a spontaneous *Rhododendron hortense* Nakai on Bizan at Tokushima, Shikoku, in 1945, and subsequently, it has been collected by Mr. Shigeru Takafuji on Ishii-cho Maeyama at Tokushima in 1971. From the investigation of the natural crossing of *Rhododendron ripense* Makino and *Rhododendron macrosepalum* Maxim., it is deduced that the natural crossing of them results the formation of *Rhododendron hortense*.

□日本林業技術協会編 (III は倉田悟著): 原色日本林業樹木図鑑 I—III. A4. 各巻図版 80-100 枚。地球出版株式会社。I. 1964 (7,500 円), II. 1968 (8,500 円), III. 1971 (10,000 円)。この本は上記の協会が計画し東京営林局や林野庁が援助し、編集委員会によって作られたもので、図版製作指導および解説は倉田悟委員が当たったという。日本に野生する有用樹木は 600 種ほどあるというがそのうち木材生産上、森林景観上、林地保全上最も重要なもの 100 余種を選んで最初刊行された。その時は第 1 卷としなかったが要求が多かったとみて、もれた高木を主として第 2 卷が発行された。そして最近第 3 卷が出たが、これには I, II にもれた高木のほかに小高木や低木を探録してある。大版の原色図は日本理科美術協会その他の第一流植物画家が 10 人以上で分担執筆しただけあって実にみごとなできばえで、印刷もすばらしい。これらの図はほとんどが生品から写生したものであるという。配列は各巻ともエングラー順になっている。解説は図と見開きになって和英両文で書いてあり、各種ごとに日本地図の分布図がついている。今はもうめったに見られなくなった「日本森林樹木図譜」や「北海道森林樹木図譜」に代わるものとして林業や林学の関係者のみでなく、広く植物関係方面、教育方面に役立つことであろう。

この本ではじめて発表された新しい学名を拾うと次のようである。I. カイシジノキ *Fraxinus Spaethiana* form. *nipponica* (Koidz.) Kurata (品種に)。II—ハマグワ *Morus bombycina* form. *maritima* (Koidz.) Kurata (品種に); バリバリノキ *Litsea acuminata* (Bl.) Kurata (新組合せ); アオギリ *Firmiana platanifolia* var. *tomentosa* (Thunb.) Kurata (変種に)。III—ケタカネザクラ *Prunus nipponica* form. *pubescens* (Koidz.) Kurata (品種に); アサカワグミ *Elaeagnus asakawana* Kurata (新種); ウラゲミツバツツジ *Rhododendron dilatatum* form. *hypopilosum* Kurata (新品種)。

(伊藤 洋)